対談特集 Vol.2

「若手世代と考える原子力」

幅広い視野から有識者のお話しをうかがう対談企画の第二回目は、「若手世代と考える原子力」をテーマに、課題の多い原子力を担っていく若手世代として原子力を専攻する研究者、学生の皆さんに座談会形式でお話しを伺いました。聞き手は元日経新聞論説委員の鳥井弘之氏です。

各氏の問題意識を聞く

話し手 羽倉 尚人氏（はぐら なおと）
東京都市大学
原子力研究所　助手

学生の時から日本原子力学会の学生連絡会などで様々な活動に携わる。一般企業を経験して、最近では人材問題など重視し活動。

主な研究分野は原子炉物理／核データ評価で、二〇一一年には日本原子力学会論文賞を受賞。

学生のときから、日本原子力学会の学生連絡会などで活動していますが、若手の議論の場などで特に今後考える必要があると思うテーマのひとつに人材確保・育成があります。

今、原子力発電所が稼働していない状況ですが、若年層、中高生に対して、原子力業界に入るとどういう方向性があるのか、また将来のキャリアパスが少しでも見えるような形にするため、ロールモデル集をつくるなどの活動もしています。今後、こうした中域ネットワークの協力も得て色々な活動をしていますが、そういうなかで、若手同士で切磋琢磨するような場を設けたりしています。また同じく学会の男女共同参画委員会では、もう少し学会の男女共同参画委員会では、もう少し技術を今後も維持していくのか、どうやって伝えていくかが重要と考えています。

学会の若手の会（YGN）では、主に三十五歳以下の原子力関係の人が集まり原産協会の地

話し手 犬飼 健一朗氏（いぬかい けんいちろう）
東京都市大学　大学院
共同原子力専攻　修士１年

エネルギーや原子力をめぐる議論のほか、学生との対話企画では産経新聞社賞を受賞。一方、ブレイクダンスなど、歌って踊れる理系男子の一面も。

研究テーマは、直接処分における使用済みMOX燃料の保管廃棄容器の設計。

原子力の今後やエネルギー政策について考えたいと思います。日本がここまで発展できたということが、原子力のおかげも必ずあると僕は思っているんです。日本の立ち位置というのを世界的なレベルで考えると、アジア各国が目指すという意味で「日本」という言葉が出てきてほしい。反面、日本が「今回、事故があったから、原子力はもうやめます」と言えば、アジア全体としても、道を塞ぐことにつながる心配もあると

以前、教員の免許をとるとき、教育実習のなかで生徒たちに言ったことは、「君たちが葉書に住所を書くとき、東京都から書くだろう、実は、それはもっと大きいことを考えれば、世界の中の、アジアの中の、日本の中の東京都なんだ。そこまで考えて、日本人はやっていかなきゃいけないところにいるんだ」ということです。そう考えるとき、原子力を好き嫌いだけではなく、もっと現実的な、色々なものを日本は背負っていることに考えつく。そうしたところから若い人のなかに、新しい見方が出てくることを期待し活動しています。世界に視野を広げて、原子力をもう少し見直してもらえればと。

羽倉　事故以前に、日本原子力学会の活動の中であったと思いますが、当時野党だった民主党の国会議員の方に講演していただいたことがありました。「エネルギー政策というのは、政権が交代したからといってぶれてはいけないんだ」ということを熱弁されていた記憶があります。「エネルギー問題は超党派で色々やっているから、政権がかわったとしても大きな方針というのは変わらないんだ」というような趣旨のお話をされていました。

政治のレベルでの問題は、やはり危機管理などの面での考慮が全然足りないとなると・・・。いつまでも方向性が決まらず不安になります。

鳥井　私が思うに、あの当時の政治はオタオタしてしまって、家庭が考えるエネルギー問題ぐらいの視野しか持ってなかったような気がします。

北薗　政治家の方がということですか。

鳥井　政治家も含めて日本社会の多くがそうだったような気がして、まさに好き嫌いでやっていたと思うのです。そのことを踏まえてどうですか。

犬飼　結局、政治って人気とりなんだなというふうに僕はすごく思いました。あの状況で、例えば自分が政治家で当選ぎりぎりだったとしたら、「いや、原子力、やめたほうがいいですよ、これからはもっともっと再生エネルギーを」と言ったほうが絶対に票をとれるわけですから。そういうことでがんがん決まっていってしまうのが政治だとしたら、エネルギー政策はもう政治家に任せるべきではないのかもしれない。そういういろいろな私情が挟まった上で、エネルギー政策を考えていいものだとは思いません。

鳥井　政治に任せられないとすると、どこへ任せるの？

犬飼　僕もそこはよくわからないんですけれども、とりあえず、人気とりのための人たちに決めてもらうのはどうなのかと思ってしまいます。

では、代案はあるのかと言われたときに、自分は今、持ち合わせていないので、そうすると、言い方としては「しっかりした政治を」となってしまうのですが、もっとメンタリティの高い人たちが真剣に考えられるように政治が機能すればよいとは思うのですが。

鳥井　このエネルギー政策に関心があり、今回のテーマに挙げました。日本は、食料自給率は四〇％程度で危機感を持ち、エネルギー自給率は原子力発電

エネルギー政策については、日本の問題意識のなかで、まずエネルギー政策上、原子力の位置づけについてお話ししたいと思います。

先日、私は福井大学で教養というか専門に入る前の学生に話をしました。「子どもが考えるエネルギー問題、家庭が考えるエネルギー問題、地域が考えるエネルギー問題、国が考えるエネルギー問題、世界が考えるエネルギー問題、あなた方は大学生なんだから、せめて国が考えるエネルギー問題ぐらいまでは考えてほしい」と。

君たちは、どう思いますか。事故後のエネルギー政策をめぐる政治の動きなど、君たちはどう受け取りましたか。

北薗　僕自身は、やはりあの事故を通して真剣に考えるようになったと思います。電力会社も、原子力規制委員会も、色々なところが真剣に考え始めた。国民と一緒にやっていこうと。しかし現実にはエネルギー政策は、くねくねと曲折をたどっているように見えます。気持ちとしてはすごくくねくねと慎重に深く考え議論するのはいいのですが、国民も十分に知識

Topic　エネ政策と原子力の位置づけ
政策のブレは政治の責任？

鳥井　皆さんの問題意識のなかで、

Topic　政策決定の軸　推進と規制
「バランスのよい関係を」

話し手 北薗 孝太氏（きたぞの こうた）
東京都市大学　工学部
原子力安全工学科　４年

エネルギーや原子力をめぐる討論会の企画や実践を通じ、みなとともに考える機会作りに取組む。

スポーツは何でも好き、大学からのひとり暮らしで料理の腕もあげた。

大学では、核融合ー核分裂ハイブリッド炉ブランケットにおける核特性の研究を行っている。

エネルギー政策に関心があり、今回のテーマに挙げました。日本は、食料自給率は四〇％程度で危機感を持ち、エネルギー自給率は原子力発電を含めても十数％と主要国では最低水準にもかかわらず関心が高くない気がします。また欧州のように、ロシアからガスのパイプラインを引いたり、フランスから原子力のエネルギーを輸入したりすることはできない状況ですから、エネルギー源というのをもっと、きちんと考えていかなければいけないと考えています。

事故を通して思ったことは、なぜ日本人はエネルギー政策というものに鈍感なのかということ。

羽倉　事故以前に、日本原子力学会の活動の中であったと思いますが、当時野党だった民主党の国会議員の方に講演していただいたことがありました。「エネルギー政策というのは、政権が交代したからといってぶれてはいけないんだ」ということを熱弁されていた記憶があります。「エネルギー問題は超党派で色々やっているから、政権がかわったとしても大きな方針というのは変わらないんだ」というような趣旨のお話をされていました。

政治のレベルでの問題は、やはり危機管理などの面での考慮が全然足りないとなると主要国では最低水準にもかかわらず関心が高くない気がします。また欧州のように、ロシアからガスのパイプラインを引いたり、フランスから原子力のエネルギーを輸入したりすることはできない状況ですから、エネルギー源というのをもっと、きちんと考えていかなければいけないと考えています。

事故を通して思ったことは、なぜ日本人はエネルギー政策というものに鈍感なのかということ。

鳥井　たしかに政治家の中にも、事故後も一貫して、エネルギーの問題はぐらぐらしてはいけないんだと言い続けていた人もいましたが、政治家が個人で頑張っても、政治は、政党の意向であるとか、上層部の意向が大きいという現実もありますからね。

羽倉　原子力委員会をなくしてしまうのは、バランスを欠くのではないかと思います。原子力規制委員会は事故の後ということもあるのか、かなり厳しくブレーキをかけているように見えます。規制というのは、本来は正しく安全に動くためにあると自分は思いますが、別の観点で原子力をみる委員会が少しバランスをとるようなことが必要ではないかと思います。

鳥井　なるほど。

犬飼　原子力委員会の重要性について自分は完全に理解できていないかもしれませんが、政策を決める上で責任もってやるという委員会、政策の軸なら必要だと思います。

何か詰め寄られるように委員会の権限や機能を削っていくだけの議論でいいのかという思いはあります。↖